資料２－１
ＦＤ委員会資料
2013 年度第 19 回 FD フォーラム報告（西澤弘行）
2014 年 3 月 13 日

2013 年度第 19 回 FD フォーラム「社会を生き抜く力を育てるために」
（公益財団法人）大学コンソーシアム京都
後援：文部科学省・京都府・京都市

2014 年 2 月 22 日（土）13：00～17：10 龍谷大学深草キャンパス 3 号館
シンポジウムⅠ
京都発！地域社会まるごと学習コミュニティ　－共に育ち，共に学び合う社会を創る－
河原宣子（コーディネーター　京都橘大学　看護学部　教授）

大学と地域社会が共に，お互いに工夫を凝らしながら学生が学びやすい環境を整えていくことが，今，求められている．このシンポジウムでは，行政と大学などの教育機関がそれぞれの持ち味を発揮して，どのようにコラボレーションしながら学生を育てていくか，そして，学生たちはどのように地域社会の中で生きているのか，いくつかの取り組みを紹介し，学習コミュニティを地域で創り出すにはどうすればいいか，大学のまち京都から情報発信したい．

「大学のまち京都・学生のまち京都」の推進
古瀬ゆかり（シンポジスト　京都市総合企画局　市民協働政策推進室　大学政策担当部長）

①京都は数値的なデータ（37 大学・14 万人の学生＝京都市民の 1 割）からも大学のまちであり，学生のまちである．
②市は 1985 年から大学政策を組織的に展開してきた．「大学問題対策委員会」設置（1985），「大学のまち・京都２１プラン」策定（1993），「大学コンソーシアム京都」発足（1998），「第１回　京都学生祭典」開催（2004），「大学のまち京都・学生のまち京都推進計画」策定（2009）
③**産学公地域の連携が重要**である．実際にやっているしこれからも強化する．
④なにより学生が主体的・積極的に活動している．
＊本学と茨城県・水戸市・近辺大学・企業との関係，学生の参加など状況は多いに異なる．我々が今後どのようにしていくかが大きな課題．

地域に根ざした教育研究による地域工学系人材の育成にむけて
文部科学省　平成 25 年度「地（知）の拠点整備事業」（大学 COC 事業）
京都の産業・文化芸術拠点形成とＫ１６プロジェクト
大谷芳夫（シンポジスト　京都工芸繊維大学　理事・副学長）

①製造業と大学に関する京都府の特性：ⅰ）人口当たりの大学数，学生数が日本最多．ⅱ）大学の 96％が府中南部に．府北部に拠点を有する工科系高等教育機関は京都工芸繊維大学と舞鶴工業高等専門学校のみ．ⅲ）製造業における都道府県別 1 事業所当たりの従業員数は京都府 46 位（12.5 人），全国平均 18.3 人．大学・短大への現役進学率は京都府１位（66.4％），全国平均 53.5％．
②「文部科学省　平成 25 年度「地（知）の拠点整備事業」（大学 COC 事業）　京都の産業・文化芸術拠点形成とＫ１６プロジェクト」　事業のポイント：ⅰ）産業界のみならず，教育委員会と連携した学校教育 16 年を見通した地域工学系人材育成のためのカリキュラム改革．ⅱ）京都工芸繊維大学と舞鶴工業

高等専門学校が連携し，工科系大学が設置されていない府北部を中心とする府広域で，ものづくり・観光等の産業振興による地域活性化．iii）教員の地域活動を評価する業績評価の導入等のガバナンス改革，地域学修の必修化による全学的取組の推進．

③　今後にむけて＝重要なこと：ｉ）地域のニーズに沿った事業であること．ii）学内における地域貢献活動に対する意識向上

京都学生祭典×地域の取り組みについて

堤大地（シンポジスト　第 11 回京都学生祭典実行委員会　実行委員長　立命館大学　政策科学部　3 年次）

①京都学生祭典：産・学・公・地域が連携する『ALL 京都』の祭

②活動理念：ｉ）京都を活気づけ，感動・笑顔を創出する．ii）京都の一員として，地域社会との繋がりを尊重する．iii）京都で学び，地域社会と共に魅力を広く発信する

③年 500 回以上の年間交流活動（e.g.夜間パトロール，打ち水，地域主催行事への参加など）

「地（知）の拠点整備事業」について

猪股志野（指定討論者　文部科学省　高等教育局　大学振興課　大学改革推進室長）

①COC 事業の背景：大学等に対する期待ｉ）大学等の教育研究が，地域の課題解決に十分応えてほしい．ii）学生が大学で学んだことが，地域社会に出てから役立つようなものであってほしい．iii）地域と教員個人のつながりを超え，大学等が組織として地域との連携に取り組んでほしい．

②他に詳細な情報があるが速報版では割愛．

西澤が考えるシンポジウムＩの重要な点は：

①真の意味での産学公地域の連携

②真の意味での学生の参加（e.g.教学改革に参加）

2014 年 2 月 23 日（日）10：00～15：30 龍谷大学深草キャンパス 22 号館 1Ｆ107

第 6 分科会　**大学の授業デザイン・授業改造の新しい形　ー授業の見学者や協力者と創るー**

ファシリテーター

筒井　洋一（京都精華大学　人文学部　教授）

報告者

松尾　智晶（京都産業大学　全学共通教育センター　准教授）

平井　孝典（佛教大学　学術支援部　学術支援課　課長補佐）

山本以和子（京都工芸繊維大学　アドミッションセンター　准教授）

芳本　賢治（大阪経済大学　非常勤講師　KEN プランニング）

CT（クリエイティブチーム）

吉田美奈子（雲の原っぱ社）

滋野　正道（龍谷大学大学院　政策学研究科　修士課程）

筌場　正起（京都産業大学　外国語学部）

資料２－１
ＦＤ委員会資料
2013 年度第 19 回 FD フォーラム報告（西澤弘行）
2014 年 3 月 13 日

コーディネーター
髙橋　伸一（京都精華大学　人文学部　教授）
第 1 部（午前）テーマ「チームとワークで意欲を引き出す授業デザイン」
ボランティアの授業協力者＝CT（クリエイティブチーム）と見学者と創る授業の新しい形の実践例

体験型ワークショップを終日行なった．報告された授業は，授業教員が 15 回の大枠（ただし目標を非常に明確）を決め，CT クリエイティブチームと名づけた，ボランティアの学外者（学生に年齢が近い）が実際に授業を行なうというもの．見学者も協力する．また，学期途中の学生からのフィードバックは事務が受け持つ．SD がしっかりしているという感じを持つ．関わる人すべてが労を惜しまないように見える．規定上の障害などはなかったかと質問すると，実際には様々な障害があったが，乗り越えたとのこと．今回の目的はそのようなことを検討することではなく，とにかくやってみる，初めの一歩を踏み出してみることだと．納得する．
基礎データ
「グループワーク概論」　京都精華大学人文学部選択科目
授業目的：対人コミュニケーションをグループワークの手法を使って改善する
履修学生：2～4 年生 40 名
授業協力者（CT）：3 名
見学者：週平均 5，6 名，延べ 95 名，10 週参加見学者 3 名
受講生数：最小 31 名，最大 41 名

最大の特徴：フェイスブック，ツイッター，ブログ上で，「大学の授業を一緒に創りませんか！」という呼びかけをしたことで，賛同者が数日で 100 名を超え，結果として 3 名が CT となった．同時に授業見学の呼びかけも行ない多くの見学者が来た．教員，学生，CT，見学者の四者で創り上げるというモデルが出来上がった．

結果：
①欠席者・居眠り学生大幅減少，学生が授業で学ぶようになってきた（学生）．
②授業全体をホールドすることと，個別学生への対応の両方に目がいくようになってきた（教員）．
③学生，CT，見学者というステークホルダー全体のコーディネート能力が向上した（教員）．
④シラバスと実際の授業との連関を意識するようになった（教員）．
⑤飲みに行く回数が増えた．

第 2 部（午後）テーマ「「授業の振り返り」を授業改善へつなげる」
①MSF（Midterm Student Feedback）：第三者によるヒアリングによって学生の意見や考えを引き出し授業改善に活かす方法．前半の授業を見学した職員による半構造化インタビュー．
②振り返りにより「学生の学びがどれだけ進展したのか」を測るにはどうすればよいか？アクティブラーニングの真の意義を考慮し，振り返りにより学生がさらに使命感をもって受講するようになるには，どのような振り返りを企画すればよいか？
③最終回での KPT 法を使った振り返り：K=Keep（授業のよかった点），P=Problem（問題点），T=Trial（改善点）という視点からの振り返り．